

平成11年度の大きなハイライトは博士課程の大研究科化である。今まで農林3学系が関係していた博士課程農学研究科の再編・整備は、この時検討していた国際地縁技術開発科学、生物圏資源科学および生物機能科学の3専攻がそのまま生命環境科学研究科へ移行する形となった。これに生物科学研究科と地球科学研究科が加わり、これらの専攻と新規専攻を加えて併せて9専攻となった。教員数約200人に達する生命環境科学研究科が平成12年度より船出する事になった。農林工学系の教員数も40人に達し、史上最高の教員数となっている。また、博士課程の生命環境科学研究科での教育・研究をカバーする範囲が広がっており、移転当初の農林工学系の陣容と様変わりしている。

大研究科とわが農林工学系を対比させると、ドイツの経済学者E.F.シューマッハーを思い出す。彼の著書「スモール イズ ビューティーフル」には、中間技術開発、技術移転、適正技術開発など発展途上国の農林業の持続可能な開発に言及した数々の彼の考え方が記憶によみがえってくる。農林工学系と言う研究集団の看板や容れ物が適正であるか、さらなる活性化を図るためにはどうしたら良いかを平成11年度の年報に目を通しながら、平成12年度以降の「将来計画」の方向を模索する気になった。また、平成12年度は21世紀の入口でもあるから、なお一層検討してみたい気になる。さらに、2001年1月から始まる省庁再編と国立研究機関の独立法人化は、きたるべき国立大学の独立法人化の行方に大きな影響を及ぼす筈である。